

資料

精神保健福祉士と看護師の連携に関する現状と課題

立垣祐子

兵庫医療大学看護学部

Issues of Collaboration between Psychiatric Social Workers and Nurses

Yuko TATEGAKI

School of Nursing, Hyogo University of Health Sciences

抄 録

精神障害者の地域での生活を促すためには、精神保健福祉士と看護師の連携が不可欠である。なぜなら、両者の専門性は生活に基軸があるからである。本稿は、精神保健福祉士と看護師の連携に関する先行研究をもとに、精神保健福祉士と看護師の連携の現状と課題について明らかにした。調査では、医学中央雑誌Web版を用い、検索エンジンの初版である1971年から2017年6月までの文献を対象とした。まず、「連携」、「精神保健福祉士」、「看護師」をキーワードとして文献を抽出したところ、141文献が抽出された。続いて本研究の目的に照らして抽出された文献のスクリーニングを行ったところ、最終的に38文献となり、これらを研究対象とした。38文献の主題を分析した結果、「多職種連携における役割・機能」を主題とするものが17文献、「多職種連携による協働の効果」を主題とするものが15文献、「多職種連携の現状」を主題とするものが6文献であった。精神保健福祉士と看護師の連携に関する現状としては、1.両者の連携により、患者や福祉サービス利用者の課題解決が効率よく図られていると捉えられていること、2.連携は、両者の職務の遂行にとって有効であると認識されていることが明らかとなった。その一方で、両者の連携は、医師、臨床心理士、作業療法士といった職種とひとまとめにして扱われており、精神保健福祉士と看護師の二者間のみ焦点をあてた検討はなされていなかった。

キーワード：精神保健福祉士、看護師、連携、多職種連携

Abstract

Collaboration between psychiatric social workers and nurses is essential to encourage mentally disabled people to live in their communities, because the expertise of both professions is centered on everyday life. This study surveyed the literature on the current situation and issues regarding collaboration between psychiatric social workers and nurses. In our study, we used the web version of "Igaku Chuo Zasshi" to search the literature published from the first version in 1971 to June 2017. The researcher retrieved 141 articles with the keywords, "collaboration", "psychiatric social worker",

and "nurse". Then these articles were screened according to the purpose of this study and eventually 38 articles remained. These became the subjects of this study. Of the 38 articles analyzed, 17 were written on "the roles and functions in multi-disciplinary collaboration", 15 were written on the subject of "the effects of multi-disciplinary collaboration", and 6 were on "the current situation of multi-disciplinary collaboration". In terms of the current situation of collaboration between psychiatric social workers and nurses, it has become clear that (a) collaboration between both groups is seen as a way to effectively solve the problems of patients and welfare service users, and (b) collaboration is recognized as an effective way to carry out the duties of both parties. On the other hand, collaboration between these parties was considered only within the broader multi-disciplinary context of doctors, clinical psychologists and occupational therapists, and there is no study which focuses solely on psychiatric social workers and nurses.

Key words : psychiatric social worker, nurse, collaboration, multi-disciplinary collaboration

I はじめに

精神障害者が地域で安定して暮らすために看護師に出来ることは何であるか。この問いは、精神看護学の実践、研究の課題の一つであり、長期入院患者の退院支援、精神科外来看護、精神科訪問看護、地域につながる様々な視点から検討がなされてきた¹⁻³⁾。その一方で、類似する課題に取り組む専門職として精神保健福祉士がいる。精神保健福祉士とは、専門的知識及び技術をもって、精神科病院その他の医療施設において精神障害の医療を受けている者、又は精神障害者の社会復帰の促進を図ることを目的とする施設を利用してある者の社会復帰に関する相談に応じ、助言、指導、日常生活への適応のために必要な訓練その他の援助を行うことを業とする⁴⁾ 国家資格を有する専門職者である。

精神保健福祉士と看護師が共通のフィールドとする精神科医療では、1986年に訪問看護・指導料が点数化され、看護師やソーシャルワーカーによる訪問が長年実施されてきた。最近では、ACT (Assertive Community Treatment) の創設が全国的に行われており、訪問看護ステーションの創設も増加している⁵⁾。支援、ケアと表現は違っても、対象者の「生活」に視点を置く両者の協働は自然な流れともいえる。臨床においては多職種連携が活発になされており、精神保健福祉士と看護師の連携についても不可欠なものとなっている。例えば、患者の入院の際に精神保健福祉士から看護師へと入院までの経過について情報提供がなされ、患者が回復し入院治療が終了する段階になると、患者の入院中の様子について看護師から精神保健福祉士へと情報提供がなされる。さらに、退院を控えた患

者のカンファレンスに両者が同席し、情報共有がなされ、訪問看護等のアウトリーチ支援に共に携わることもある。

保健医療分野における多職種連携の研究・教育は、世界的にみてここ20年の間に急速に発展してきたと言われている⁶⁾。また、日本における医療・福祉職の専門性と役割分担については、英国との比較から、看護師、理学療法士・作業療法士、心理士、社会福祉士・精神保健福祉士の業務が全般的に医療に偏っていること、そして社会福祉士・精神保健福祉士が比較的広い業務を担っていることが特徴として指摘されている⁷⁾。多職種連携が進む中、本稿では、日本における精神保健福祉士と看護師の連携に焦点をあて、両者の連携の現状と今後の課題について先行研究をもとに明らかにする。

II 研究目的

精神保健福祉士と看護師の連携の現状と課題について先行研究のレビューをもとに明らかにし、両者の連携に対する示唆を得る。

III 方法

1 先行研究のレビューの手続き

先行研究のレビューは、次のような手続きで行った。まず、検索システムにより先行研究の総量を概観した。次に精神保健福祉士と看護師の連携における現状と課題に関する論文を限定した。書誌データベースは、医学中央雑誌Web版を用いた。医学中央雑誌Web版は、国内で最高水準の書誌データベース検索システムとさ

れる⁸⁾。検索年度は、検索エンジンの初版である1971年から2017年6月までとした。検索日は2017年6月30日とした。

本テーマを示す「看護師」、「精神保健福祉士」、「連携」をキーワードとし、検索式を「看護師」and「精神保健福祉士」and「連携」と設定した。論文の種類は、会議録、症例報告を除く「原著論文」とした。医学中央雑誌での原著論文の定義は、「医学・歯学・薬学・看護学・獣医学およびその関連分野に関わる研究、開発、調査で独自性、新規性のある文献で、著者名と所属機関名が必ず記載されており、目的、対象、方法、結果、考察、結語で構成されているもの。図、表、写真、参考文献を含み、要旨、要約があるもの。講演または会議録でも、原著的内容、形式を有するもの。論文の簡略化された形式をとった記事（速報・短報）も含む。症例報告は原著論文に含む」⁹⁾とされている。キーワードの一つである「連携」については、シソーラス上の下位概念である「職種間人間関係」、「チーム医療」、「多機関医療協力システム」、「地域社会ネットワーク」、「多部門連携」を全て検索した。主題に絞り込むために、抽出された対象論文のスクリーニングを再度行った。このスクリーニングでは、医学中央雑誌Web版で設定されている論文の種類のうち、「解説」、「座談会」、「Q&A」、「原著論文/事例」を除外した。「原著論文/事例」は事例の特性が強く影響されているため除外した。次に論文を確認し、分析対象論文を限定した。分析対象文献の発表年次ごとの論文数を集計するとともに、対象文献のタイトル、要旨、本文を確認し、精神保健福祉士と看護師の連携に関する文献から、両者の連携の現状と課題を明らかにした。

2 用語の定義

本研究のテーマである「精神保健福祉士と看護師の連携」の用語の操作上の定義は、松岡による「専門職種間連携」の定義である、「専門職種間連携とは2人以上以上の異なった専門職が共通の目標達成をするために行うプロセスである」¹⁰⁾を応用し、「精神保健福祉士と看護師が共通の目標達成をするためのプロセス」と定義した。

3 倫理的配慮

抽出した対象文献リストを提示するとともに著者の知見を正確に引用することに努めた。なお、本研究は人を対象とした研究に該当しないため研究機関等における倫理審査は受けていない。

IV 結果

1 検索システムによる先行研究の総量概観

「精神保健福祉士」、「看護師」、「連携」の3つのキーワードを含む条件で検索した結果、141文献を抽出した。次に、論文の種類のうち「原著論文/事例」、「解説」、「座談会」、「Q&A」を除外して、検索した結果、75文献が抽出された。

2 精神保健福祉士と看護師の連携の現状と課題

75文献について、タイトル、抄録、本文を検討したところ、75文献のうち37文献が除外対象となった。除外した文献は、具体的に、看護師と精神保健福祉士の連携を扱っていないもの、事例を検討したものなどであった。これらの手続きの結果、最終的に38文献を分析の対象文献とした。

第一の結果として、両者の連携は、医師、臨床心理士、作業療法士といった職種とひとまとめにして扱われて、検討されており、精神保健福祉士と看護師の二者間だけに焦点をあてた検討はなされていないことが明らかになった。

第二の結果として、そのことを踏まえた上で38文献の内容分析を行った結果、「多職種連携における役割・機能」を主題とするものが17論文¹¹⁻²⁷⁾、「多職種連携による協働の効果」を主題とするものが15文献²⁸⁻⁴²⁾、「多職種連携の現状」を主題とするものが6文献⁴³⁻⁴⁸⁾であった(表1、2、3)。「多職種連携における役割・機能」に分類した最近の文献に、異儀田の「精神科チーム医療において他職種が認識する看護の役割」がある¹¹⁾。この文献では、他職種が看護師の役割をどのように認識しているかについて参加観察法とインタビューによりデータを収集し分析している。看護師を取り巻く他職種として、医師、薬剤師、作業療法士、精神保健福祉士をとりあげて調査対象者とし、それらから見た看護師の役割を明らかにしている。次に「多職種連携における協働の効果」に分類した最近の文献には、中村らの「精神科急性期治療病棟におけるクリニカルパスの実践」²⁸⁾がある。この文献は、患者の退院支援にクリニカルパスがどのように役立ったかについて、クリニカルパス導入前後を比較し、支援に携わった看護師、作業療法士、精神保健福祉士にインタビューを実施している。その結果、多職種として連携が取り易くなったと、多職種連携に効果があったと認識されていることを明らかにした。「多職種連携の現状」に分類した最近の文献には、香山の「精神科病院における訪

表1. 多職種連携における役割・機能

	論文中に調査対象として扱われている専門職種	論文中に他職種として扱われている専門職種	論文の主題	著者	発表年
1	看護師	医師 薬剤師 作業療法士 精神保健福祉士	他職種が認識する看護師の役割	異儀田 はづき	2016
2	看護師	-	看護師の退院支援に関する知識・認識、看護師がどの職種が退院支援を担当すべきと考えているかといった看護師の見解	葉山 相得ら	2015
3	(看護職) (福祉職) (行政職)	-	訪問支援における看護職、福祉職、行政職の支援の違い	井倉 一政ら	2015
4	医師 看護師 作業療法士 精神保健福祉士 臨床心理士 (事務他)	-	医療観察法指定通院医療機関における職種ごとの業務量の比較検討	福田 敬ら	2014
5	(看護職) 社会福祉士	-	退院支援担当となったソーシャルワーカーと看護師の連携におけるコンフリクトの内容	佐藤 奈津子	2014
6	看護師 精神保健福祉士 (事業担当者)	-	精神科未治療・治療中断者等、治療関係の確立が困難な対象への訪問支援について職種間の社会的役割・機能、教育のあり方を比較検討	廣川 聖子ら	2013
7	看護師 精神保健福祉士 作業療法士	-	精神科療養病棟長期入院者の退院支援方法を職種間で比較検討	上里 めぐみら	2012
8	精神保健福祉士 社会福祉士 看護師 (専門職の資格を持たない者)	-	地域医療連携における精神科病棟看護師の課題	荻野 光昭ら	2012
9	医師 精神保健福祉士 看護師 臨床心理技術者 作業療法士	-	医療観察法の指定入院医療機関のチームメンバーが他職種の捉え方	中澤 海ら	2011
10	社会福祉士 看護師 作業療法士	-	職種間の援助技術を比較検討	三品 桂子	2009
11	医師 看護師 薬剤師 作業療法士 精神保健福祉士 臨床心理士 栄養士	-	精神科病院における職種間連携に対する各職種の捉え方の比較検討	椎谷 淳二ら	2009
12	医師 看護師 作業療法士 精神保健福祉士	-	職種ごとの患者との関係性の比較検討	岩井 和子ら	2009
13	看護師	精神保健福祉士 作業療法士	老人性認知症疾患病棟における精神保健福祉士と作業療法士の常勤配置の有効性と各職種の役割	沖田 美保ら	2008
14	看護師	-	看護師による専門相談の効果の評価	近澤 範子ら	2008
15	医師 看護師 臨床心理士 精神保健福祉士	-	職種間の役割と協力体制	熊谷 亜紀子ら	2006
16	看護師 作業療法士 精神保健福祉士	-	ミーティング記録から各職種の支援方法を比較検討	表田 真理子ら	2003
17	看護師	-	看護師による家族支援には他職種との協働が必要	池邊 敏子ら	2003

表2. 多職種連携による協働の効果

	論文中に調査対象として扱われている専門職種	論文中に他職種として扱われている専門職種	論文の主題	著者	発表年
1	看護師 作業療法士 精神保健福祉士	-	多職種協働によるクリニカルパスの効果	中村 知朗ら	2016
2	看護師 臨床心理士 作業療法士 精神保健福祉士	-	多職種協働によるオープンダイアログの効果	土井 優太郎	2016
3	看護師 薬剤師 精神保健福祉士	-	多職種協働による禁煙指導の効果	樋口 憲宏ら	2016
4	看護師 作業療法士 理学療法士 言語聴覚士 精神保健福祉士	-	多職種協働による多職種カンファレンスの効果	福島 晴樹ら	2016
5	看護師 作業療法士 精神保健福祉士	-	多職種協働による訪問看護ステーションでの支援の効果	齋藤 美和ら	2015
6	医師 看護師 作業療法士 臨床心理士 精神保健福祉士	-	多職種協働による入院早期のカンファレンスの効果	中山 達也ら	2013
7	精神科医師 精神科看護師 臨床心理士 精神保健福祉士	-	多職種協働による精神科コンサルティング・リエゾンチームの効果	富安 哲也ら	2013
8	医師 看護師 精神保健福祉士 作業療法士	-	多職種協働による退院準備度評価尺度の評価に基づく多職種カンファレンスの効果	中渡 圭太ら	2013
9	医師 薬剤師 看護師 精神保健福祉士	-	多職種連携による精神科急性期治療病棟での服薬指導の効果	大下 伸子	2012
10	医師 看護師 薬剤師 作業療法士 精神保健福祉士	-	多職種協働による集団疾病心理教育プログラムの効果	横井 志保ら	2010
11	看護師	-	多職種協働による入院時面接の実施の効果	美濃 由紀子ら	2010
12	医師 薬剤師 看護師 栄養士 精神保健福祉士 作業療法士	-	多職種協働による患者心理教育の効果	坂口 肇ら	2009
13	医師 看護師 薬剤師 精神保健福祉士	-	地域薬剤師会を含む多職種合同カンファレンスの効果	広岡 わか子ら	2009
14	医師 看護師 精神保健福祉士 臨床心理士 作業療法士 薬剤師	-	多職種協働による診療会議の導入の効果	佐藤 誠ら	2006
15	医師 看護師 精神保健福祉士	-	多職種によるケース検討会議の効果	石井 好子ら	2004

問看護の現状に関する調査報告」がある⁴³⁾。この文献は、全国の公立精神科単科病院の訪問看護の現状を調査したものである。専従職員として、看護師、精神保健福祉士、保健師、作業療法士、その他の職種があることを報告し、現状からみえる課題の一つとして地域との連携があることを指摘している。これらの文献に共通する特徴として、いずれの文献も職種間連携に焦点をあてて、結果を導き出しているものの、精神保健福祉士と看護師の二者間の職種間連携には限定していないことが挙げられる。

第三の結果として、文献を発表年代別に区分したところ、独立した二職間の検討ではないが精神保健福祉士と看護師の連携に関する文献は、2文献が発表された2003年に初めて見られ、徐々に増加していることが明らかになった(図1)。

V 考察

考察1 何故、精神保健福祉士と看護師の二者間の連携が検討されていないのか？

先行研究では、精神保健福祉士と看護師の二者間のみに焦点をあてた検討はなされていなかった。両者の

連携は、医師、臨床心理士、作業療法士といった職種とひとまとめにして扱われていた。この背景にはどのようなことがあるだろうか。松岡⁴⁹⁾は、多職種ヘルスケアチームの形態と特徴を3つのモデルに区分し整理をしている(表4)。3つのモデルとは、1) マルチモデル、2) インターモデル、3) トランスモデルである。マルチモデルは、役割の解放性がなく、専門職が独立しているモデルであり、急性期ケアに向いているモデルとされる。それに対して、インターモデル、トランスモデルは、専門職間の役割は解放され、職種間で相互作用が大いに認められ、さらに職種間に階層が

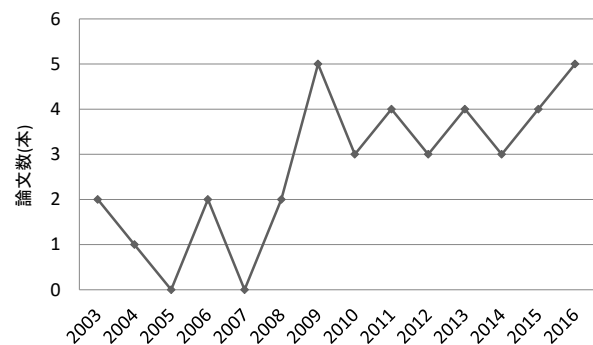


図1. 論文数の推移

表3. 多職種連携の現状

	論文中に調査対象として扱われている専門職種	論文中に他職種として扱われている専門職種	論文の主題	著者	発表年
1	看護師 保健師 精神保健福祉士 作業療法士	-	訪問看護ステーションにおける専門職業配置の現状	香山 明美	2015
2	医師 薬剤師 看護師 精神保健福祉士	-	多職種アウトリーチ活動における妥当な診療報酬制度を検討	吉田 光爾ら	2014
3	看護師	-	精神科急性期治療病棟看護師が考える継続看護に必要な多職種連携	成岡 千鶴ら	2011
4	医師 看護師 精神保健福祉士 作業療法士 薬剤師 診療心理士	-	多職種協働の医療上の問題の実態	田野 将尊ら	2011
5	看護師	-	精神科デイケア看護師の他職種連携の実態	石川 幸代ら	2011
6	看護師	-	岐阜県下の全精神科病院14施設の看護管理代表者もしくは訪問看護担当者にアンケートと構成的面接を行い、訪問看護の実施状況について調査	村岡 大志ら	2010

表4. ヘルスケアチームの形態と特徴 松岡⁴⁹⁾より

	専門職の相互作用性	役割の解放性	専門職の階層性
マルチモデル	小	無	有
インターモデル	大	部分的にあり	無
トランスモデル	大	有	無

ないモデルとして、その特徴が分類されていた。精神保健福祉士と看護師の2者間の連携について検討が行われていないという現状をこのモデルを使って考察すると、精神科領域における職種間連携は、インターモデル、トランスモデルを中心に行われているといえるのではないかと推測する。これらのモデルでは、職種間の境界は明確に区別されない。境界が明確に区別されない以上、独立した職種ごとの検討は、導き出されないということにつながっているのではないかと考える。

考察2 地域を中心とした精神科医療・保健・福祉の展開と研究課題と本研究の限界

今日の精神科医療、保健、福祉の分野は、精神科病院から地域へと移行している。地域を中心とした精神科医療、保健、福祉のケアや支援は、慢性期ケアに通じるものであり、急性期ケアに向いているとされるマルチモデル⁴⁹⁾では、対応できないことから説明が可能であると考え。その一方で、これらの連携のモデルを整理した松岡は、「モデルは理念上とりあえず区別できるものであって、実際上は、かなり複雑な様相を呈している」と指摘している⁴⁹⁾。連携とは、そもそも流動的であり、境界が曖昧な特性を持っている可能性は否定できない。パターン化して共有認識を図っていくという観点とそれが変化するものであるという観点からもその実像にせまる必要があると考える。

次に文献の主題は「多職種連携における役割・機能」、「多職種連携による協働の効果」、「多職種連携の現状」の3つに区分された。「多職種連携による協働の効果」に分類された文献では、連携を必要なものとして好意的に捉えていた。その一方で「多職種連携における役割・機能」に分類された文献において、すでに専門職種間の役割間葛藤に注目する文献¹⁵⁾があったことは注目すべきである。精神科領域の専門職の連携について、大谷は、「精神障害者には生物・心理・社会的アプローチを統合した支援に通じる多様な専門職の関与が必要であるが、多職種連携のノウハウは教育されておらず実践には困難が伴う」と指摘している⁵⁰⁾。松岡は、「専門性から生じる差異こそがヘルスケアチームの強みであるが、一方でそれは弱みにもなり、それゆえコンフリクトマネジメントが重要である」と述べ、コンフリクトを調整する必要性について示唆している⁴⁹⁾。先述したように連携の効果をそれぞれの専門職が享受し続けるためには、コンフリクトや連携の困難さにも直面化し、その実態や生じる背景を明らかに

していく必要があると考える。

文献数の推移からは、2003年から2017年に至るまで緩やかに増加していることが明らかになった。精神科医療、保健、福祉の地域での展開はますます促進されると考える。これからも定期的にレビューを行い、現状と課題を整理していくことが課題である。本研究の限界は、著者単独で行った分析の結果であることが挙げられる。レビューの質を高めるためには、複数人で多様、かつ客観的な視点からレビューを行うことが必要である。また、検討すべきこととして「連携」の捉え方により抽出される結果が異なる可能性があることが挙げられる。今回の文献検討では、キーワードで連携を特定し、また精神保健福祉士と看護師の二者間に焦点をあてるにとどまっている。今後、この研究課題を進めるにあたり、二者間の連携に焦点をあてながらも、二者以外の専門職者との関係性も捉えた多面的な二者間の連携を考えていく必要がある。

最後に、看護師という立場から、本課題の必要性を述べておきたい。2017年10月に看護学教育モデル・コア・カリキュラムが公表され、そのなかで学士課程においてコアとなる看護実践能力が示されている⁵¹⁾。看護職として求められる基本的な資質・能力として、かつ実践の基本となる専門基礎知識として、保健・医療・福祉における協働や連携が掲げられている。これらは言うまでもなく、地域包括ケアの時代の看護職が独自の役割を持ち、遂行するための必須の知識であり能力である。看護における他職種との連携や協働に焦点をあてた実践、研究の深化は、看護職の新たな役割拡大にもつながっていく課題であると考え。

本稿は、日本精神保健福祉学会第6回学術研究集会(2017年)において発表を行った内容に加筆修正を加えたものである。

文献

- 1) 岩本雄一. 長期入院患者の退院支援における精神科看護師の支援—精神看護専門看護師の立場から—. 日本精神保健看護学会誌. 2017, 26(2), p.21-30.
- 2) 北恵都子, 船越明子. 地域生活の継続を支援する精神科外来看護ケアの実施時間. 日本精神保健看護学会誌. 2016, 25(1), p.65-75.
- 3) 川内健三, 板山稔, 風間眞理. 訪問看護師が精神障害者の支援を行う中で困難を乗り越えた体験. 日本精神保健看護学会誌. 2017, 26(1), p.10-19.
- 4) “精神保健福祉士とは”. 福祉・介護精神保健福祉士について

- て. 厚生労働省.
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougai-shahukushi/seisinhoken/index.html, (参照2017-06-30).
- 5) 岩崎香. 精神障害とともに生きる人々のための権利ベースのアプローチ 精神保健医療福祉領域のソーシャルワークを中心に. 精神医学. 2017, vol.59, no.8, p.731-737.
 - 6) 松岡千代. 多職種連携の新時代に向けて: 実践・研究・教育の課題と展望. リハビリテーション連携科学. 2013, 14(2), p.181-194.
 - 7) 野中猛. 図説ケアチーム. 第3版. 東京, 中央法規出版, 2010, p.82, ISBN978-4-8058-2947-9.
 - 8) 諏訪敏幸. 看護研究者・医療研究者のための系統的文献検索概説. 第1版. 大阪, 近畿病院図書館協議会, 2016, p.187, ISBN978-4-9903284-1-2.
 - 9) “検索ガイド第3版Ver.5”. 医中誌Web検索ガイド. 非営利活動法人医学中央雑誌発行会. <http://www.jamas.or.jp/user/guide/index.html>, (参照2017-06-30).
 - 10) 松岡千代. ヘルスケア領域における専門職間連携ーソーシャルワークの視点からの理論的整理ー. 社会福祉学. 2000, 40(2), p.17-37.
 - 11) 異儀田はづき. 精神科チーム医療において他職種が認識する看護の役割. 東京女子医科大学雑誌. 2016, 86(1), p.109-119.
 - 12) 葉山相得, 安部輝幸, 池田佳穂里, 船越悦子, 杉原巨樹, 皆越美香. 精神科救急入院科病棟における退院支援を考える 病棟看護師の退院支援に対する意識調査を試みて. 日本精神科看護学術集会誌. 2015, 58(3), p.15-19.
 - 13) 井倉一政, 宮越裕治, 西出りつ子, 河田志帆, 畑下博世. 地域における精神障害者に対する訪問支援者の実態に関する調査. 三重看護学誌. 2015, (17), p.13-22.
 - 14) 福田敬, 菊池安希子, 長沼洋一, 三澤孝夫, 安藤久美子, 岡田幸之. 医療観察法とその周辺ー症例と取り組みー 東京都内の医療観察法指定通院医療機関における業務量調査. 臨床精神医学. 2014, 43(9) 9, p.1309-1316.
 - 15) 佐藤奈津子. ソーシャルワーカーと退院調整看護師間のコンフリクトに関する研究ー退院支援担当者へのインタビュー調査からー. 北星学園大学大学院論集. 2014, (5), p.19-38.
 - 16) 廣川聖子, 大山早紀子, 大島巖, 角田秋, 添田雅宏, 村嶋幸代, 萱間真美. 生活保護受給者自立支援事業における行政と民間との連携 今後の地域精神保健アウトリーチ支援に必要な技術に関する検討. 医療と社会. 2013, 22(4), p.343-357.
 - 17) 上里めぐみ, 知花正秀, 吉元めぐみ, 宮里浩. 長期入院者の退院支援コーディネイトの検討. 沖縄県看護研究会集録27回. 2012, p.55-58.
 - 18) 荻野光昭, 青木周二, 岸田雅彦. 精神科地域中間施設が抱える困難さの実態 アンケート結果から見えてきた病棟看護師としての課題. 日本看護学会論文集 精神看護. 2012, (42), p.20-23.
 - 19) 中澤海, 遠藤淑美. 医療観察法の指定入院機関のチームメンバーが考える多職種連携. 2011, 日本精神科看護学会誌, 54(2), p.56-60.
 - 20) 三品桂子. 重い精神障害のある人の地域生活支援における援助者の実践スキル 英国バーミンガムの質的調査結果と結果が示唆すること. 精神保健福祉. 2009, 40(4), p.341-351.
 - 21) 椎谷淳二, 尾形多佳士, 谷中輝雄, 志渡晃一. 専門職からみた精神科病院におけるチーム医療の現状. 北海道医療大学看護福祉学部紀要. 2009, (16), p.61-68.
 - 22) 岩井和子. 治療から生活支援まで 精神科医療従事者における患者との関わりの様相と関係性. 精神障害とリハビリテーション. 2009, 3(2), p.190-196.
 - 23) 沖田美保, 浅野百合子, 川神美智代. 病棟常勤PSW・OTの患者ケアにおける有効性と看護との関係. 日本精神科看護学会誌. 2008, 51(1), p.378-379.
 - 24) 近澤範子, 玉木敦子, 川田美和, 立垣祐子, 原田奈津子, 青山のぞみ, 蒲池あずさ. 看護師による『こころの健康相談』実践モデルの検討. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要. 2008, 15巻, p.119-133.
 - 25) 熊谷亜紀子, 國井泰人, 阿部清孝, 久能紀子, 岩崎稗. 新潟中越地震発生後1ヵ月半経過時におけるこころのケア活動. 臨床精神医学. 2006, 35(4)p.433-441.
 - 26) 表田真理子, 松本理絵, 田辺蘭. Ns.OTR.PSWの視点の違いからチームアプローチのあり方を検討 個別ミーティングの記録の分析を通して. 日本精神科看護学会誌. 2003, 46(2), p.96-99.
 - 27) 池邊敏子, グレグ美鈴, 高橋香織, 池西悦子, 山内美代子. 精神病院の一急性期病棟での家族援助の実態. 岐阜県立看護大学紀要. 2003, 3(1), p.9-14.
 - 28) 中村知朗, 中山幸俊, 奥谷広行. 精神科急性期治療病棟におけるクリニカルパスの実践. 日本精神科看護学術集会誌. 2016, 59(1), p.232-233.
 - 29) 土井優太郎. オープンダイアログの手法を用いた対話的かかわりについての一考察. 日本精神科看護学術集会誌. 2016, 59(1), p.178-179.
 - 30) 樋口憲宏, 後藤悌嘉, 岩見悦子, 吉田浩子, 花木重徳, 川原美津子. 精神科閉鎖病棟における多職種による禁煙指導の効果. 日本精神科看護学術集会誌. 2016, 59(1), p.160-161.
 - 31) 福島晴樹, 宗像正樹. ワークシートを用いた多職種カンファレンスの有効性. 日本精神科看護学術集会誌. 2016, 59(1), p.40-41.
 - 32) 齋藤美和, 香山明美, 佐藤理香, 遠藤まき, 大場綾希子, 阿部みよ子, 高橋いみ子, 齋藤 和子. 精神科訪問看護ステーションの1年間の取り組み 治療中断者への支援を通して. 日本精神科看護学術集会誌. 2015, 58(3), p.273-276.
 - 33) 中山達也, 伊藤綾香, 坂本泰樹, 名雪和美, 青木勉. 多職種によるカンファレンスの有用性. 旭中央病院医報. 2013, 35, p.36-37.
 - 34) 富安哲也, 上田将史, 小石川比良来, 大上俊彦, 井古田 大介. 精神科コンサルテーション・リエゾンチームの効果の分析 フォーカスグループインタビューの結果から. 総合病院精神医学. 2013, 25(1), p.16-22.
 - 35) 中渡圭太, 中村こずえ, 高橋潤, 武田美咲, 辰己朋子, 鈴木敦子. 精神科病棟入院患者に対する退院支援 DRIを用いた多職種連携. 日本看護学会論文集精神看護. 2013, (43), p.46-49.

- 36) 大下伸子. 多職種で運営する服薬教室 役割分担と運営の工夫. 岐阜作業療法. 2012, 14, p.64-65.(11)
- 37) 横井志保、鶴澤拓也、宮崎志保、大場裕司、岡村幸恵、坂詰景子、須郷久代、名倉友見、相原友直. 精神科急性期病棟における集団疾病心理教育プログラム 多職種チームとの協働による実践より. 日本精神科看護学会誌. 2010, 53(2) p.146-150.
- 38) 美濃由紀子、龍野浩寿、宮本真巳. 指定入院医療機関における司法精神医療の実態に関する研究 多職種による入院時受け入れ面接と内省深化のアプローチに焦点をあてて. 精神科看護. 2010, 37(2), p.42-47.
- 39) 坂口肇、中村伸一、福田耕嗣、丹羽真由美、相川祐子、榊原全雄、白井雅樹. 急性期治療病棟における多職種参加型患者心理教育の効果 抗精神病薬治療下主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版日本語版を活用して. 日本精神科看護学会誌. 2009, 52(2), p.396-400.
- 40) 広岡わか子、大井敬子、広岡佑三郎、井出英輝、須田裕之、依田一美. 精神科早期退院予定患者の合同カンファレンス参加後の退院患者への在宅支援の一例 保険薬局薬剤師の報告. 日本薬剤師会雑誌. 2009, 61(10), p.1273-1275.
- 41) 佐藤誠、山田武二、菅原ゆかり、羽野莉映、柴美恵子. 社会参加型病棟における診療会議の取り組み 多職種との連携から見えたチーム医療に必要な課題. 日本精神科看護学会誌. 2006, 49(1), p.318-319.
- 42) 石井好子、根本栄子、飯田恒幸、菅原紀子、大澤慶子、石川佐知子、植木理知子. 退院促進および退院後の生活支援を目的とした「地域連携ケース検討会議」の開催の意義 総合病院精神科病棟を退院する事例をとおして. 日本看護学会論文集精神看護. 2004, (35), p.24-26.
- 43) 香山明美. 精神科病院における訪問看護の現状に関する調査報告. 全国自治体病院協議会雑誌. 2015, 54(8), p.74-76.
- 44) 吉田光爾、伊藤順一郎. 多職種アウトリーチサービスと医療経済 診療報酬上の課題と今後. 精神神経学雑誌. 2014, 116(6), p.499-504.
- 45) 成岡千鶴、竹澤睦子、福田亜紀. 急性期治療病棟で勤務する看護師が考える継続看護. 日本精神科看護学会誌. 2011, 54(3), p.18-22.
- 46) 田野将尊、池島静佳. 精神科病院における院内連携の実情と課題 都内精神科A病院の現状から. 日本精神保健看護学会誌. 2011, 20(1), p.33-41.
- 47) 石川幸代、原田瞳. 精神科デイケア看護師の多職種連携の実際 精神障害者の地域生活を支えるために. 共立女子短期大学看護学科紀要. 2011, (6), p.43-53.
- 48) 村岡大志、片岡三佳、井手敬昭、坂本由美、森康成、千葉進一、谷岡哲也. 岐阜県下における精神科病院での訪問看護の実施状況からみた課題. 日本看護学会論文集精神看護. 2010, (40), p.12-14.
- 49) 松岡千代. ヘルスケアにおける多職種連携の特徴. JIM. 2012, 22(3), p.184-188.
- 50) 大谷京子. 職種の役割と多職種間連携. 精神障害とりハビリテーション. 2008, 12(1), p.34-39.
- 51) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 看護教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指す学修目標～. 2017, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (参照2018-01-10).